

# 諸同志への報告

—— 共労党の三分裂にあたって

共産主義労働者党労働者革命派

## 一、事実の経過

わが共産主義労働者党は、一九七二年夏をもって「党」としての一体性を失ない、最終的には政治党派として分裂をとげるに至りました。

党の分裂。解体を対外的。客観的に明らかにした最大の事実は、赤色戦線派（R派）が、蜂起戦争派の再編成された党派ブロック「8・25共闘」に参加したことによって最終的に示されます。これに前後する「9・10首都圏活動者会議」（R派による）や、それに前後する「R君の暴力事件」などのさまざまの事件は、むしろ三分裂の派生的表現に他なりません。

また、この間、共労党の「統一」や「再生」は言葉としては語られました。それを真実のものとして推し進める行為はなされませんでした。統一的政治党派の最底の物的表現である党事務所閉鎖に対して、各党派とも、あたかも他人ごとのようにふるまっていたのが実体でした。この事実は、三分裂を止揚・統一する力よりも、もはや分裂、解体の力の方が三つの傾向全体を貫き、より強かった政治的結果を物語っています。

結党以来、とりわけ第三回、第四回大会路線の深化・発展を一貫して追求してきた大多数の経営細胞——現労働者革命派は、七二年神鋼闘争を頂点とする新たな地平の創出に少なからざる成果をえてきました。しかしながら、こうした蓄積をもちつつも、その反面でこの分解を回避しえなかつたわれわれの弱さを自己批判せねばなりません。弱さとは、われわれ労働者革命派が、とくに首都において組織的結集力を欠いていたということにつきまします。

その原因は、六〇年代の党指導の中で「理論・政治方針はインテリ指導者に、実践は労働者で」という二元的分業構造に自らを限定してきた結果として、われわれの中に根強い大衆運動主義的、思想集団的傾向をつくり出してきた現れであるともいいかえられます。

そのために、われわれは、路線と実践の相対的正しさを断えず確認し、その点での優位性をもちながらも、党の分裂の原因となった誤れる暴險主義的な政治。組織路線への指導部の偏向を独自に克服することができませんでした。そして、破局を強めつつあった七一年（頭初）からの第三次党内闘争に対して、積極的に対応し、自らと党をきたえ前進させるについては総体として消極的であり、「面従背背」の姿勢をつづけてきました。また、昨秋後の分裂過程でも、私たちは頑強に組織的一貫性をもって闘いぬき、危機を克服する組織方に弱点をもっていました。

これまで、共労党の存在とその内にひそむ可能性を信じ、期待し、あるいは推進し、工場・経営・学園・基地で、あるいは党の諸機関で下から回から党を支えていた諸同志に皆さんに、われわれはこの事実を残念ながら報告しなければなりません。とくに、共労党・プロレタリア学生同盟の旗の下に六九年秋期政治決線を闘い、警察権力によって虐殺された漕谷同志とその家族に対して、彼の血を受け継いで共労党を七〇年代革命党として発展させえなかつたことに、痛恨の念をもって、自己批判いたします。

## 二、共労党の結党とその変革

共労党は、一九六七年二月、まったくの新改良主義党に転落し

た日本共産党に歴史的にとつてかわり、戦前、戦後の日本共産主義運動の革命的伝統を継承すべく、「過渡的な党」として出発しました。

結党時の情勢の最大の特徴は、ベトナム人民による不屈の革命戦争が史上最大最強のアメリカ帝国主義による侵略反革命戦争と歴史的な死闘を繰り広げている真最中でした。そして、このベトナム戦争によって励まされ、呼びおこされた日本のごく少数の学生と青年労働者が「この米侵略隊をベトナムに飛ばすな」の一言で決起した第二次砂川闘争の開始の時でした。

一九六七年とは、一方では、国際共産主義運動の大分裂、多数の右翼日和見主義、現代修正主義による無気力、低迷をテコとしたプロレタリア階級の階級としての風化が進み、とくに日本では、マイホーム主義、企業主義、国益主義を掲げる帝国主義労働運動が労働者階級の内部から、右から、大きく席捲しはじめた時代でした。われわれは、結党の翌日から、砂川闘争に加わり、二度の羽田闘争——佐世保——王子——新宿闘争へと連続したベトナム反戦の闘い、自国帝国主義に立ち向う街頭闘争や学園闘争をはじめとして「労働運動の左への転換」を目指す諸闘争を全力で闘いぬきました。

それから六年、われわれは、さまざまな試行錯誤、前進と後退を重ねつつ何よりも実践、行動を通じて自らを変革してきました。それは、稲谷同志の文字通り自らの生命をかけた闘いに象徴されます。なかでも、六九年五月の第三回大会における「現代世界革命の党」として自らを方向づける諸決定は、結党時の「八一方国声明の創造的発展」（平和共存、反独占民主主義を通ずる社会主

義革命）などの日共反対派の母班をふっさる政治的飛躍でした。しかし、第三回大会は、同時に党内に多様の要素を混在させたまま残し、これらをも一つの力に統合できないままに、党の実践的方向を不分明にしてしまふ弱点をもっていました。

そうした不分明性は、砂川闘争、羽田闘争から六九年秋期政治決戦の三年間の激闘と、最終的に第一期共産党を総括した第四回大会（七〇年二月）にも持ち越されています。すなわち、七〇年代を「労働者総反乱の時代」として時代を先行的に規定し、そのために労働者、人民の中に分け入る党として自己を定め、プロレタリア階級に固く依拠して闘うという正当な階級闘争の方法を定めながら、われわれの中に、左翼暴険主義的方向への傾斜をつよめる焦燥路線を根強く胚胎させる余地を残してしまいました。

### 三、決定的分岐点

かくして、党の決定的分岐点、対立は、七一年とくに秋季沖繩闘争をめぐって一挙に爆発しました。その原因は、依拠すべ対象として規定されたはずのプロレタリア階級が、今日の状況のもとでなお革命的主体たりうるか、といった驚くべき第四回大会決定の否定的認識、したがって、闘わざるプロレタリアートリによって代るものとして党の軍隊化を押しきろうというR・P指導者の党指導に端を発しています。党は、このときから、工場細胞を基礎とする闘いから攻めのぼる道を追及すべしとするわれわれ、およびそこで党と大衆運動を二元的に把えることによって、中間主義的道を選ぼうとする中間派の対立が交錯するようになりました。

現代革命の全分野にまたがる基本的な課題を内包した党内闘争

は、したがって、あくまでも現代プロレタリア革命の全体像の確立に肉薄する萌芽をひめていたとも言ひべきですが、ともかく集中的には秋季の「高次の軍事」方針をめぐる対立となりました。

ヨーロッパ、アメリカ諸国とともに、帝国主義本国における軍争問題は、労働者の自衛や、軍隊の叛乱など、棄かれるべき現代革命の根本理念、戦略配置、その展望とともに不可分の一環として避けておろすことのできないものです。また、われわれの歴史に則していえば、近代日本革命運動史上の左翼暴険主義——一九三〇年代初頭、一九五〇年代前半——からよく教訓を学びとることが必要です。教訓を学びとるとは、六全協の偽購的なくずし清算と、その後の「違法性を恐れる党」の運動に墮落することの正しさを意味しないのは当然です。問題は労働者の自衛や軍隊の叛乱の是非ではなく、原則的な立場から、十分な歴史的分析、研究を行ない、過去の誤りを繰返さない今日的方法をいかにして提起するのにかつての組織的な取り組みが必要であったのです。

にも拘らず、これら不可欠の思想的・政治的作業とそれに対応した強固な組織体制づくりを抜きにして、ラテン・アメリカあたりの旧植民地国家の民族闘争の「都市ゲリラ」戦略的なものが、一挙にかつわが国の政治情況とは無関係に進められていきました。そして、彼らは「全人民武装決起の一月へ」という全くひとりよがりのセクト主義的スローガンを「統一」紙上にかかげるにいたりました。これは、プロレタリア大衆とはむろんのこと、プロレタリアの先進的部分とも全く隔絶した急進的インテリゲンチヤの一部リーダーが、焦燥の末とはいえ潜越にもプロレタリア大衆

を信頼せず、自らしか血路を開くことができなかつたと思ひあがつたことの結果です。鬼面人をあざむく大言壮語と党内民主主義をふみにじり、「暴動路線の左へ」という安易なヒロイズムに買かれた「左翼願望症」こそ、党内に全く不必要な混乱を招き、分裂に追いやつた最大の原因でした。

また、この急進的インテリゲンチヤの思想と方針の裏側には、必然的に活動家を「消耗品」としかみない根本的に人間を軽視した「使い捨て思想」がありました。あまつさえ、警察権力に党の財政帳簿や重要メモを没収されてさえ（マン・ツマンで尾行されていた）、なお強行しようという全く信じられない最悪事態に陥ろうとしたのです。

まさに、その直前に労働者党员、諸細胞の決起によって、第九回中央委員会を開催させ、暴発はくいとめられました。七二年に入ってから連合赤軍の悲惨な結末を見るにつけ、もしもあの時暴走したら疑いもなく党は壊滅していただしよ。九中委こそは、立ち上りの遅さと労働者党员の組織的結集力の弱さに示される弱点をもちつつも、三、四大路線を継承し、三里塚闘争とは全く異質な暴険主義路線の発動を未然に防止したものでした。だが、不幸にも一部の指導者は、事実を陰ベイし、ねじまげ、体面にこだわって、自己批判を避け、逆にわれわれを「スト破り」「反革命分子」とのしり、またこの両者の間に中間主義派が生まれたことには、党は全く三分されました。

### 四、歴史的な再編の中で

それから約一年、赤色戦線派の諸君にとっては、われわれより

も再建赤軍との政治的距離が近くなり、逆にわれわれにとって反帝労働運動を指向し実践する諸君との距離が相対的に近くなり、冒頭のように最終的に三分裂をとげるにいたしました。

一年、いやここの半年の政治的流動・分解、再編成は、自民党、社会党、はては日共など既成体制内政党から反代々木諸派、あるいは革命的左翼の中でも急速に進んでいます。そして、それを必然的に基礎づけるものは、ベトナム革命の最終的勝利を基軸としたアジアと世界の歴史の再編成をめぐる激闘であり、国内では農民層の階級的分解と労働者階級の流動、再編成であり、それに呼応する階級内部からの帝国主義的労働戦線統一と政治戦線再編をめぐる闘争です。一二月衆議院議員総選挙の結果は、一方では六〇年代高度経済成長政策下での日本資本主義の政治的・社会的矛盾が激化し、大衆的不満が表出したと同時に、他方での社会党とくに共産党の「拾頭」は、これら既成左翼の国民党化、体制内化の完成を示しています。われわれの針路——反帝労働運動と前衛主体の形成——についての実践的提起は、別に用意する予定ですので、ここでは省略いたします。

とまれ、共労党結党を推進してきたメンバーを多くもつわれわれは、当時の初心、すなわち「日共に代る革命的な前衛党を」めざして闘ってきました。初期の目標からみれば共労党の三分裂はある種の「挫折」にちがいありません。それでも「労働運動の左への転換」の方針は、反帝労働運動の展開の中で七〇年ゼネ石精、七一年日産季節工反乱闘争に一定の寄与をし、七二年には画期的な神鋼闘争の勝利となって結実し、一方では九・一六三里塚闘争にみられる農民と労働者・学生の力強い団結の一翼を形成し

てきました。

### 五、われわれの決意と進路

われわれは、何をどのように築き、何をプロレタリアートの共有財産としてきたのか、あるいはどこで失敗したのか。清算主義でも自己満足でもなく、闘いきたった過去と現在を「脚下照顧」し、新左翼の一翼としてあったわれわれの歴史の総括をここでじっくりと進めたいと思います。そして、同じ誤りを二度と繰り返さないために、確固たる土台形成を、思想的・理論的に、政治的組織的に築くつもりです。

今日の内外情勢とプロレタリアートの状態の中で、われわれの日常性への回帰は、常に大衆運動主義的な、あるいは思想集団的な風化を一方で再生産します。「量は少なくとも質の良いもの」を目指す現代の前衛性は、つねに大きな試練に立たされています。われわれは、当面する諸闘争を通じて、そして体制的には襲いかかる「日本列島改造論——新全総」によって表現される国独資体制の下での全面的な体制的合理化攻撃への反撃とともに、前衛的機能と思想・政治性の貫徹を自らに課して再び自立してゆきたいと思えます。

また、この間のゼネ石精、日産、神鋼の闘争や左翼少数派運動等、われわれの血みどろの実践は、工場経営に確固たる基礎をおいた工場前衛——革命的な前衛の必要性と必然性を痛切に提起してきました。前衛党抜き反帝労働運動論は、絵に書いた餅にすぎません。また、三里塚、沖繩、入管、叛軍、公害、狭山差別裁判、部落解放の諸闘争もこのことをつき出してきました。

われわれは、現代革命の土台として不拔の基礎を生産点において共産主義者の前衛党に自らの脱皮、解体、飛躍をかけて再編成し、現代世界革命の一環としての日本プロレタリア階級の前衛として真にふさわしい革命党形成を目指してゆきます。そして、その真の土台構築を基本的に志を同じくする同志の集団形成に着手し、職場、経営、工場の細胞の自立的運動展開を基礎にし、それを支える共産主義者の自立的政治集団として結集して闘います。

以上われわれは、わが共労党のめざした歴史的課題の到達点とその「挫折」をありのままに確認し、その負の遺産によく学び、われわれの組織的弱点を掘り下げて自己批判、相互批判を活発にし、蓄積された共有財産を固め発展させてゆきます。

一九七二年一月

### 共産主義労働者党労働者革命派

- 第一 経営細胞
- 第二 経営細胞
- 第三 経営細胞
- 第四 経営細胞
- 第五 経営細胞
- 第六 経営細胞
- 第七 経営細胞
- 第八 経営細胞
- 第九 経営細胞
- 第一〇 経営細胞

「追記」 われわれは、以上をもって「共産主義労働者党」の名称を使わず、新たな組織結集に向います。新たな名称は、十分な合議のうえ決定します。

連絡先

電話〇三(七四三) 三八三二